慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ケネーの社会思想史的一考察
Sub Title	A study of François Quesnay's place in the history of social thought
Author	植木, 憲二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1950
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.43, No.3 (1950. 9) ,p.177(41)- 197(61)
JaLC DOI	10.14991/001.19500901-0041
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19500901-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に、眞に具體的に實在するものとは如何なるものであるかと云うことを明らかにせねばならない。かくしてこそ始めて稀少性定義の意義も眞に明らかになるのである。ここにこれらを論ずることは出來なかつたが、これらに關しては特に場所の思想とも云われるきものが考えられなければならないであろう。

ケネーの社會思想史的一考察

植木憲二

一

ケネーの「經濟表」(Tableau Economique)が經濟學上の劃期的な産物であり、ミラボーによつて世界創造以來の三大發見の一つとして、文字の發生・貨幣の案出・と並んでこれが稱揚されたことは遍く知られている。

事實、ケネーに先行する幾多の優れたる經濟學探求者(註1)の存在にも拘わらず、科學としての經濟學が建立されたのは、この「經濟表」の誕生を俟つてであると云うも過言ではない。故に、「經濟表」を中心にして、數多の專門的研究がなされ、既にその成果が解說書或いは入門書にまで及んでいることは少しも怪しむに足りない。然るに所謂社會思想史的見地よりする研究は、數指を數えるに止まつている。(註2)從つて「經濟表」を生んだケネーの思想の根源を辿り、その哲學的認識論、及び方法論を解明し、以つて「經濟表」のもつ科學性を指摘し、同時に歷史的・社會的制約性を剔抉することが、未だに社會思想史的研究の上に重要な對象として殘されていると見なければならない。

（註1）マルクス「剩餘價値學說史」邦譯「マル・エン全集」第八卷、第一章、特にウイリアム・ペティ、ボアギルベールを擧げなければならぬ。

（註2）　久保田明光「フィジオクラシイ」（新經濟學全集第五卷）第四章　第三節
久保田明光、「ケネーに於ける物理的世界と倫理的世界（への序說」（經濟學研究、第一集、昭和二十三年）
G. Shelle, de docteur Quesnay.
Ch. Gide et Ch. Rist, Histoire des doctrines économiques.
H. Denis, Histoire des systèmes économiques et socialistes.
デー・ローゼンベルグ、直井武夫譯「經濟學史」研進社

II

ケネーが、彼の專門であつた醫學から轉じて最初に執筆したのが、Evidence（明證論）である。（註1）この哲學論文が副題として、Métaphysique なる語を添えているところに、彼の形而上學に對する異常なる關心を窺うことができる。この著作は、數少ない彼の哲學論文にあつて最初のものであり、此の種のものとしては論文體裁を具えた唯一のものであるという意義以上に更に重要な要素を含んでいる。（註2）というのは、彼の形而上學的認識は、évidence（明證）の力を借りて始めて成立するものであり、逆に明證に貫ぬかれた體系こそは、彼の形而上學的世界像に外ならなかつたからである。これを例えば、ケネーが對人間關係において最も有利とし、又それに向つて人が努力せねばならぬと考えられた理想的社會秩序は、いわゆる l'ordre naturel「自然的秩序」の顯現を意味するのであつたが、この「自然的秩序」なる最高にして不變の存在こそ、明證を得て經濟表に集約的に表現され、一つの形而上學的世界を表示している如き、正にそれであろう。然らば明證とはいかなるものか、「明證という言葉は――とケネーは冒頭で言う――いかなる精神もこれを拒み得ぬ程の、それ自身によつて明瞭確實な一つの確證性を意味している」（註3）と。續けて又言う。「二種の確證性がある。即ち信仰と明證である。」（註4）かくてケネーは、自明の理として何らの反省的契機をもたぬ信仰と明證について論述を展開している。「信仰は我々に理性の光を以つてしても認識しえぬ眞理を敎える。明證は自然的な知識に限られている。然しながら、信仰は常に明證と結びつくものである、即ちなぜかといえば明證なくして我々はいかなる信用すべき動機も認める譯にはいかぬだろうし、從つて超自然的眞理をも知るには至らぬであろうから」（註5）と。ここに我々は自然法論者の眞理に對する認識におけるオプティミズムを、ケネーの中にも見出すことができる。後にも觸れるが、ケネーは敬虔な宗敎的人間ではあつたが（註6）、決して冷徹な哲學者とは言い得ない。それ故自然的認識を明證に、超自然的眞理を信仰によつて得んものとし、哲學的認識論が些かも宗敎的信仰と抵觸せぬことを慮つたのである。然しケネーのかかる認識論及び世界觀は新鮮な何物をもつていなかつた。ためにデー・ローゼンベルグをして次の如く叫ばしめている。「――とうした考え方の中には新奇にして獨創的なものは何もない。強いて新しい點を求めれば、ケネーが既にその當時時代遲れになつていた諸思想の體系中の弱點や腐朽した方面を拾い上げ、これを手際よくまとめて一個の體系の形で提示している點位なものであろう。要するに、所謂世界觀の諸問題においては、ケネーは、その當時としても舊式で時代遲れの考えを抱いていたのであつた。けだし、彼の時代は既にディドロ、ドルバック、エルヴェシウスの時代であつたではないか。」（註7）と。この評は眞に當を得たものと言うことができよう。それ故前掲の「明證論」を續けて引照することは徒らな試みの如くに映るであろうが、然もなおケネーの思想のエレメンタールなものが明證であり、これがすべての基調となつて彼の思想的限界を結果していることを思えば、一概にそれを退けることは不當であろう。再び明證と信仰との關係に關する彼の言うところを聞けば、「信仰は感官に

よつて教えられる、即ちその教義は自然的知識の媒介を得て始めて説明され得るものである。人は感ぜられる物體についての觀念そのものなくしては、最も表現に難い信仰という神秘に關する如何なる觀念も持ち得ぬであろう。又同様に、明證なしには確證性とは何か、眞理とは何か、更に信仰とは何であるかを理解することはできぬ。何となれば理性の光なくしては、天啓の眞理は人間に近寄り得ぬものであるが故に」(註8)と。

以上の中に二つの重要な點が存在している。第一は信仰が感覺的知覺による自然的認識の媒介を必要としているということである。即ちケネーは神祕にして表現を超えて信仰に手放しで埋沒してはいないのである。そしてその所以は、彼の思想の源泉であるイギリス經驗論、特に、ロックの感覺論が此處に於て重大な役割を演じているところにある。第二は、それにも拘わらず、感覺器官の認識能力とは別に明證の力を借りて來るということである。即ち、理性の光(les lumières de la raison)に貫ぬかれた明證に徴して始めて、眞理、確證性、信仰を認識し得るということである。これこそ、彼の爲には同じく思想的源泉であつたデカルトの二元論、特にその後繼者、マールブランシュ(N. Malebranche)の決定的な影響と見ることができる。以上の二點を中心にしてケネーの思想的系譜を探るのは次節に讓つて、信仰と明證との關係を結論づけたケネーの言葉を引用すれば、「明證は信仰の中にあるのではない。然し信仰が我々に教える眞理は明白な認識と切り離され得ぬものである。かくして信仰は明證の確證性と對立し得ないものである。そして自然的認識に限られている明證は又、信仰と對立し得ぬものである」(註9)と。かくて容易に理解し得る如く、物質的存在である自然の認識——感官の機能を必要とするのであるが——は、それに對しては現實の感覺を拒むとともできなければ知らずにもいられぬような明證によつて、一つの確證性を得るものであり、かかる現實的な明證による自然認識と、その概念の力を介して、今一つの確證性を有するところの信仰による超自然的認識が成立され得るということである。而も尙かかる見解が當然加えられるであろう懷疑論の攻撃に對しては、それが誤まてる確信であることを認めさせるに充分であると斷言している。以上の是非を問う前に、ケネーのかくの如き思想がいかにして形成されて來たかを考えたい。ここでは明證を後の研究の始點とし、伏線として用意するにとめるであろう。

(註1)　此の語はフィジオクラートの自然法思想の集約的表現用語として重要な意味を有する。

(註2)　他の哲學的著作は、Memoires de l'Académie Royale de chirurgie; Préface. と今一つは Essai phisique sur l'économie animale の第二版出版に當つて增補した時の追加篇 la liberté 及び De l'immortalité de l'ame がある。

(註3)(註4)　Quesnay, Oeuvreo économiques et philosophiques. P.888, P.764.

(註5)　Quesnay, Oeuvres. PP. 764—5.

(註6)　Gide et Rist, op.cit., P. 5.「フィジオクラートは永遠の眞理の守護者であるが如く明證を常に語る態度により、少々の倦怠と疲勞を與える嚴肅にして非重なる信徒であつた」

(註7)　ローゼンベルグ、前掲書、一八二頁。

(註8)　Quesnay, Oeuvres. P. 765.

(註9)　ローゼンベルグ、前掲書、一八二頁。

三

「明證論」が書かれるに至つた契機は、ケネーがヴェルサイユ宮殿における自室に多くの學者を迎えて政治、經濟、及び哲學を論じ多くの知識をその中から得たのであるが、その招かれた學者の中にアンシクロペディストであるディドロー、グランベールがおり、兩者の編集になる Grande Encyclopédie に稿を寄せる機會を持つたからである。(註1)この事は見逃し得ない重要な意義を有している。その故は、ケネーがともかくもアンシクロペディストとの一應の交

渉があつたということである。即ちケネーがその哲學的思想において唯物論に對しては熱烈な反對をし、「百科全集（アンシクロペディ）」がデイドローの影響下にあつて明白に唯物論的な色彩を帶びるに到るや、遂にこれに對する參加を拒否さえするに到つたという事實にも拘わらず、彼等との接觸から思想的な接觸とその影響を推測することが許されるのではないかと思われるからである。（註2）然もそれが眞實であれば前述せる如きケネーの思想的源泉であるデカルト及びロックの問題（特に後者において）は、その一半が氷解されるところとなるであろう。かかる意味において一言アンシクロペディストのことに觸れるのは蛇足ではなかろう。

アンシクロペディストはその中に微溫的な保守派があり、革新的な急進派があるとはいえ、フランス大革命へ向う一大奔流としては一貫した傾向を見ることができる。かかる見地からは個別的差異は量的差異に還元し得るのであり、共に目指したものは舊原理の克服であり、舊秩序の改革であつた。しかも注目すべきは共に據つた思想の根本的基盤が等しくイギリス經驗論のベーコン、大陸の合理主義哲學のデカルト、及びベーコンの流れを直接に汲むロックの感覺論であるということである。就中特徴的なことは、「アンシクロペディストは、例外なく感覺論者であり、その師にして友であるコンディヤック（Condillac）の學説を奉じ、生得觀念を否定して極端な經驗論を主張した」（註3）ということである。人も知る如くコンディヤックはロックの感覺論を敷衍し、更に徹底してそれを發展させたのであるが、それが同時に重大なことは、一つにその感覺論が十八世紀のフランス唯物論に多大の影響を與えたことであり、今一つはかかる感覺論がデカルト的な形而上學、就中本有觀念（les idées innées）との抵觸を惹起したことである。この本有觀念を認めることは、感覺的認知の外に、それとは獨立した一つの知識源泉の存在を許すことになるのである。されば、アンシクロペディストが此の點に激しい攻擊を向けたのは少しも不思議ではない。しかもケネーがこの點に關してはアンシクロペディストと調を一つにしていたことは彼の思想的性格の一面を明確に表示している。即ち、彼を圍繞する諸思想家が徹底せる感覺論を有しており、それが彼等の進歩性を特徴づけていたのであるが――何故ならば感覺論的認識論は、その本質において唯物論を指向しているものであり、極言すれば、それは唯物論の極めてナイーブな表現段階と言い得るのであるが、かかる意味で感覺論が當時において有する意義は、何らかの形で舊制度（l'ancien régime）に立向う理論的基盤を提供したからである。（註4）――ケネーもかくの如き感覺論の影響を受け、ロックに組してデカルトの本有觀念を攻めたのは、客觀的には彼の思想體系に一陣の清風を送つており、結果的には彼の保守的態度を僅かに救つているからである。

今少しくケネーの感覺論を見れば次の如くである。「われわれは二種類の感覺――私は單に感情的な感覺と、代表的な感覺とを言いたいのである――がわれわれの全感情、全思考、及び自然的で明證的な全認識を形づくるものだということを認知している。（註5）」この言が明らかに示す如く、感覺がいわゆる自然的認識の源泉であることが主張されている。しかもこのことがロックの感覺論の直接的影響であることは言う迄もない。（註6）「明證論」によれば「感ずるということの特性は我々の感覺的存在がその存在自身を感ずるということ、及び感覺を起す時にそれがその存在を確信されるということによつて、一つの受動的な特性である。（註7）」ことを表示しているものと考えられる。即ち、ここで注目すべきは此の受動的特性が感覺的存在にとつて根本的であり、又本質的であるということである。即ち更に嚴密に言えば感覺が發生する場合、意識するものが感覺的存在であることの故に、この特性たるものは正に感覺的存在に外ならないからである。（註8）かくして感覺は「感覺的存在（l'être sensitif）が、感受能力によつて受けられるところの形式、或いは感情である。なぜならば、この特性は感覺を受ける能力に過ぎぬからである。（註9）」として、感覺知覺における受動的（pas-

sive）な感覺的存在を強調している。ケネーはこの感覺的存在に關して長い説明を加えているが、（註10）それはあく迄感覺的存在が感覺と區別されなければならぬということ、しかも感覺的存在はそれを觸發する外的契機に從屬しているものであるということ、即ち自らは自身感覺を起し得ぬものであるということ、等々の消極的性格が述べられているのである。然らばかかる受動的な感覺的存在を觸發して感覺を生ぜしめる認識の源泉であり客觀的存在であるものは何か、ということが問題になる。そこでケネーは明確に言う。「我々は、物體とか素材と呼ぶところの客體は、それ自身、自然的秩序の下にあつて我々の感覺的存在のあらゆる樣々の代表的觀念、種々の感情、幸福、不幸、意志、情熱、決心の物理的原因であり、又、この客體は確實にして永續的な法則に從つて我々を教え、我々に感ぜしめるものであることを經驗する。これら同じ客體――それが何ものであろうとも――及びこの法則は、それ故、自然的秩序の下では我々の感情、認識、及び意志の必然的な原因である」（註11）と。この言のみを見れば、認識における客體の本源性を主張している點、たといそれが機械論的な物理的因果論に裏づけられたものとはいえ、明らかに唯物論的色彩を帶びている、しかもそこでは正しくロック、コンディヤックと共にデカルトの本有觀念の否定をおこなつているのである。即ち客觀的存在の感覺的經驗が認識を構成するというのは、直ちにベーコン、ロックに與してデカルトの本有觀念を排斥することを意味するものなるが故である。然しながら本有觀念の否定はアンシクロペディストが共通におこなつたところであり、ベーコンの原則から出發したディドロ、ダランベールが最もこのことに熱心であつたことを思えば、ケネーのそれは、この兩者の影響を受けて、或は他のアンシクロペディストと歩調を合わせるといつた消極的な意味でなされたものと解せられる理由が充分にある。なぜならば、彼は本有觀念の否定を正面に押し立てることによつて、難なくそれに代るべき神を裏面においてすりかえたからである。少しくこの問題を考察して見よう。度々前述せる如く、ケネーは感覺論的認識論を採つていたのであるが、この場合、感覺的認識を成立せしむるための媒介的役割を擔う感覺的存在と、かかる感覺的存在のあらゆる表現樣式の原因である素材的客體との性格が先ず解明されなければならない。前者を精神的實體と呼び、後者を物質的實體と稱えることが許されるならば――かかる意味においてケネーが兩者を問題としていることは明らかであるが――精神的實體はそれ自身全く受動的にして消極的な存在であるに過ぎず、物質的實體も亦それ自身感覺的存在を觸發する單なる素材的存在に終つている。されば此の二つの實體は、自ら能動的な活動をおこない得ず、從つてそれ自身認識を成立せしむる能力を有していないばかりか、兩者はそれぞれ全く獨立的な存在でしかあり得ない。然らばこの樣な物心兩者の獨立的存在が、いかにして結合されて認識活動がおこなわれるのかということになる。ここに兩者に對する能動的にして創造的な第三者の力に俟たなければならぬ必要が生ずる。それがケネーの神を持ち込む所以である。「そこから二種の認識が生れてくる、とローゼンベルグは言う――（一）經驗に立脚せる認識、――ここではケネーはロックに與し、彼と共に本有觀念の存在に反對している、（二）信仰に立脚せる認識、――第一種の認識の對象は物質的な世界と社會的な世界とである。第二種の認識は神と彼岸の生活とである。」（註12）第一種の認識對象においては、神の恩惠を受けて「われわれの自己の感覺に對する內的觀察によつて必然的な結果として生ずる」（註13）明證が認識の確證性を貫ぬくものであるとはいえ、尙ここでは感覺と經驗が重要な認識の與件であり、かかる意味において本有觀念と相容れぬことになる。第二種の認識對象は明證と並んで確證性を有する信仰によつてのみ成立し得る神的世界を問題とする。ここではロック、コンディヤック、或は他のアンシクロペディストとは異つてデカルト＝マールブランシュを採つている。デカルトにあつて有名な明晰かつ判明（clara et distincta）の思想は、神の觀念において考えられているのであり、無限的完全存在たる神と、有限不完全存

在たる人間との認識關係は、後者から前者はその性質上生ずることはできず、前者の啓示によつて後者の中に明晰かつ判明なる前者の觀念が生ずるというのである。即ち人間意識の中に神の觀念が確實に含まれているということの故に神の存在は必然的に證明せられるということである。しかも外的物體は人間の作るものではないが故に、明らかに獨立的存在であるという。かくすれば、確證性を有する實體は神、精神、及び物體の三者ということになる。然るにデカルトは有限的精神の思惟と同樣に有限的物體の屬性たる延長（etendue）は、神に依存するものであり、兩者にあつては相互依存關係は存在しないと見るのである。即ち神のみが絶對的存在であり、他は神に依存してのみ活動的屬性を發揮し得るのである。かくして神を中心とする物心二元論が成立する。これをケネーが物心兩者の獨立的、受動的存在に、第三の實體たる神の創造的、能動的存在によつて運動・活動・相互作用を營ましめたことと照せばケネーに對するデカルトの影響を容易に知ることができるであろう。即ちケネーは言う。「人間は單純な存在ではない、それは肉體と魂との合成物である。然し消滅すべきこの結合は、それ自身で存在するのではない。此の二つの實體は相互に作用することはできない。凡ゆる生物に生命を與え、絶えず能動的、感覺的、及び智的な形態を生み出すのは神の作用である」（註13）と。しかもこの言葉が「われわれの明證的知識は、信仰なしには我々自身を認識し、他の諸動物から人間或は理性的動物を本質的に區別するような相異を發見するのに充分ではない。……然し信仰は、至高の智がそれ自身この世に生れた全ての人間を照らす光であり、人間は知性と結ぶことにより、本質的に禽獸と區別さるべきより高い認識の段階に、即ち道德的な善惡の認識に昂められること……を我々に教えるのである」（註14）という言葉の後に續いたものであることを知れば、それはデカルトの後繼者にして觀念論的一元論を以てデカルトを超克せんとしたマールブランシュの思想を直接的に汲んでいることを理解するであろう。彼は物體の屬性たる延長、精神の屬性たる思惟に相互作用を見なかつたばかりか、更に進んで神が一切の存在物の創造主であり、一切の存在物を自己に包含していると主張する。從つて彼にあつては、認識と觀念の源泉は神にあることになるのである。（註15）かくしてケネーがデカルト・マールブランシュの影響を受けた思想的經路が、實は彼の保守性を導く所以である。即ちマールブランシュを介してデカルトに繋がつていることは自ら神の國を通ることを意味するからである。扨てフランス革命を用意する啓蒙主義のイデオロギーは、その重要な局面として神に立向う必要があつた。それは封建的勢力の擔手の一翼として、神とその教義を楯とする高級僧侶及び教會が攻擊の對象とならざるを得なかつたからである。故にイギリス經驗論の影響を受けたもの――その中にはベーコンにつながるヴォルテール、ホッブスに結ばれるルッソーが含まれる――特に感覺論的認識論を採るものは、それが假令ディドロー、ドルバックの如き徹底せる唯物論ではなくとも、少くとも神に對しては理神論（déisme）で向うのが一般的であつた。これは感覺論が本質的に具えている唯物論的傾向が、神という超絶的存在に衝突せざるを得ない必然性を有しているからであり、かくの如き障壁を解消せん場合には、ディドロの如き普遍感覺論的な唯物論に進むものは勿論のこと、他の啓蒙主義者もおしなべて神を世界の無人格的第一原因としてのみその存在を許容したのであつた。從つてそれは封建制度における教會的世界觀の支柱としての神に對する挑戰を意味していたのであり、時には無神論への橋渡しの役さえ演じていたのであつた。然るにかくの如く他の感覺論者がともかく理神論の線を限界としていたにも拘らずケネーが同じくロックの感覺論を採りながらなぜそこ迄に至らなかつたかと言えば、それは彼が神に對してはマールブランシュの立場を容れていたことに因がある。かくてケネーは神と信仰に關してはマールブランシュに、自然認識の面ではロックに夫々の範圍を設け、相互の抵觸を避けたのであつた。故に神は何にも妨げられず自己を主張し得たし、感覺的經驗は神の聖域を犯すことなく自ら定めた自然領域を

固守し得たのであつた。

（註1）久保田明光、「フィジオクラート」三七—八頁。
（註2）ローゼンベルグ、前掲書、一八二頁。
（註3）本田喜代治、「近代フランス社會思想の成立」日本評論社、五一頁。
（註4）海峽を渡つて來た感覺論及び唯物論は、當時のフランスに於ける教養として一般に滲透し、デカルトを壓して一つの革新思想を齎らしたのである。本田氏、前掲書。
（註5）Quesnay, Oeuvres. PP.766—7.
（註6）勿論此の點ロックの影響と見るべきだが、同時にコンディヤックの徹底せる感覺論の影響も考えらるべきである。此の言に關する限り、ロックが認識を感覺と同時に反省活動の獨自な知識源泉の力によるとした點、寧ろロックのフランス版コンディヤックの影響と見る方が當つているだろう。
（註7・8）Quesnay, Oeuvres. P. 767.
（註9）Quesnay, op. cit., P. 768.
（註10）Quesnay, op. cit ケネーは寧ろ大部を此の説明に當て、四項から四三項に至つている。
（註11）Quesnay, op cit, PP. 769—770.
（註12）ローゼンベルグ前掲書、一八二頁。
（註13・14）Quesnay, Oeuves. P. 793.
（註15）久保田明光、「ケネーに於ける物理的世界と倫理的世界への序説」參照。

四

扨て以上の如きケネーの哲學的認識論における妥協性と不徹底はいかに解さるべきか。それは明白に階級的根源をその基盤として有し、その反映として特徴づけられたものと言えよう。當時はルイ十五世の專制主義的絶對主義が封建的諸勢力と新興せる第三身分（le tiers état）の上に巨大な權力として跨つていたのである。然し何といつても絶對王政の驚くべき濫費は極度に國家財政の貧困を招き l'ancien régime の崩壞が貴族や高級僧侶には身を以つて感ぜられていた。從つて封建的勢力は勃興する敵對勢力の脅威に對し、或いは公然と第三身分の側に走り、他は封建社會に代るべきブルジョア社會に封建的な外衣を被せることによつて、「ブルジョア社會が前者——封建社會（筆者註）——の新版に外ならないかの如き幻想を造り出すはかない外觀」（註1）を與えることに滿足した。ケネーが後者に屬することは言うを俟たない。「第三身分の代表者でありながら貴族という『名譽ある』稱號を得、光まばゆきポンパドゥールの庇護と國王の寵愛を享有せる宮廷侍醫ケネーは、彼自身との外觀の擒となつていた。彼は封建的衣裳をまとうたブルジョアジーの化身であつた」（註2）とローゼンベルグは言う。正しく、ケネーは自らの階級的基盤たる第三身分と貴族との階級的妥協の息子であつた。とれはエンゲルスが「一六八八年の階級的妥協の息子」と呼んだロックと軌を一にしている。さればケネーが「その政治的信念において絶對主義に與することは當然と言える。尤もこれにはケネーが支那の專制君主が天理の支配と拘束を受くべき仁君の如くに映り、その合法的專制政治（despotisme légal）を最善の政治形態と觀たために（註3）、自國における專制主義をその外面的類似性を以つて直ちに支那のそれと等置せしめ、開明君主を願つて最高の政治を出現せしめんとした理由を見逃す譯にはゆかぬ。ともあれケネーのかくの如き政治的信念は、押し寄せる革命の氣運を、開明君主の上からの漸進的な變革を以つて防ぐ役割を必然的に擔わされたのである。然しながら十八世紀の啓蒙思想家の大部分も亦君主制に對しては寧ろ攻擊の對象とすることを避けたのである。今とれら啓蒙思想家を四つのジャンルに分つてケネーを觀ればそれは次の如くであろう。（註4）第一にヴォルテール並びにその

一派は、國王に對しては穩やかな態度であり、教會の神に對しては假借なき鬪爭をした。それは理神論であつて世紀の進歩に大きな貢献をなしたが、現實的には上層ブルジョアジーと貴族とは自由主義的な極く溫和な一翼を代表していた。第二はルッソーとその追隨者である。彼等は丁度その逆に、國王に對しては鬪爭を試み、神に對しては理神論的自然宗教の敬虔な信徒としてこれを認めた。彼等は政治的には上層ブルジョアジーのそれよりも遙かに急進的な反抗意慾を盛つた小ブルジョアジーの理論家であつた。第三にケネーを祖とするフィジオクラートである。これは前二者とは異つた獨自の歷史感覺を有し、客觀的にはブルジョア社會秩序の建設に貢献した。とはいえ、神の攝理である善なる「自然」を主張し、祭壇に對しては手を觸れず敬虔であり、玉座に對しても眞に忠誠であつた。第四がディドロ、ドルバック、エルヴェシウスら唯物論者である。彼等は玉座と祭壇を同時に攻擊した。彼等にあつて無神論（athéisme）は自然科學的研究によつて裏付けられたのである。然し彼等の考えていた經濟學がフィジオクラートに接近したこととはアンシクロペディとケネーとの關連を考えれば容易に理解できる。しかも彼等は政治的には少くとも極度に制限された君主制、なかば共和制の思想を抱いていたのである。以上四つのグループを較べれば、ケネーはその中で最も保守的であり、時代遲れであつたことは以上のことから明確に解る。すなわち神に對しても敬虔であり、絶對王制に對しても忠誠であるというのは他の三つには見られぬところであるからである。從つてケネーが「le fanatisme et la tyranie（狂信と暴政）」に對する聖なる連合」（註5）と呼ばれる、人間歷史の記念碑アンシクロペディを城塞に大同團結（ランシャンレーガーム）して舊制度と鬪つた壯擧に加わり得たのは、一見不思議の如く映ずるのである。なぜならば、中世の教會＝狂信と專制主義的絶對主義＝暴政とそは舊制度の二大支柱としてその表裏を形成していたのであり、ケネーが前述のごとく敬虔な信徒であり、忠誠な臣下であることは明らかに矛盾であるからである。この問題はケネーの自然法思想及び自然科學特に生物學の援用を得て成立する經濟學との結びつきにおいて考えられなければならない。ケネーの自然法思想は、社會現象が必然的な關係において結ばれ、個人も國家も、その關係を正しく認識し得るならばその行動をそれに合致せしむることが可能であると考えたのである。そのかぎり中世神學の權威に對して自然的法則を科學的法則に迄昂めて對置せしめんとしたものであり、かかる意味においてそれが封建的なものへの挑戰を志向していたのである。（註6）勿論同じ自然法思想家としてのルッソーの如く、かかる自然の永久的な法則と秩序を理性と良心によつて認識し實踐するというのとは異り、ケネーはそれを神の意志に基かしめているのではあるが。次にケネーがロックの自然法思想の重要な特徴である財産私有權を自然權とみる着想（註7）を繼承していることとは見逃せない。即ち私有財産及び自由の維持は個々の利益が全體の利益と離れぬという自然的秩序の問題に發展し、かの有名な「爲すに委せよ、行くに委せよ」laisser faire et laisser passer なるマクシムを生み出すことは（註8）所有權と主權に關して當時の制度に對する穩健な反抗を示すものであり、かかる自然法がその實現をみるのは一切のものを自由に任せる自由主義制度においてであるから、その爲に重商主義を基礎とする舊經濟制度の政府干渉政策と對立せざるをえなかつたからである。この樣な意味において始めてケネーが「聖なる連合」に名を連ねる所以が解される。然しながらケネーの自然法思想は樂觀主義を基調としている。それは近代自然法の礎石を置いたストア學派とエピクロス學派の二つの基本的類型の系列において考察さるべきである。（註9）前者は自然法を「宇宙と人生とを通貫する萬古不易の神的ロゴスの存在を認めて、それを以つて人間が至上の幸福を達成する爲に遵奉すべき自然の大法と考える」という神學的色彩の強いものであつた。それ故彼等の憧憬する自然狀態というのは、人類が眞に完全なる平等と自由を享受し得たと思われる黃金時代を指していた。かくてゼノンを始祖とするこの學派は中世のアクイナスを經て近代自然法の確立者グロチウスを

見、ロック、モンテスキウ、そしてケネー並びにフィジオクラートに受け繼がれてゆくのである。これに對して後者は「現實的人間の自然本性を實證的に觀察してそれに即應した幸福達成の理法を追及する」（註10）という現實的意義が強く前者のごとき形而上學的前提を否定しているのである。かくてこの學派の自然狀態は道德的放縱と弱肉强食の行われた未開の時代を指し、かかる不安の解決と進歩を人類の理性の力によつて齎らさんとした。そこに社會契約說の發生を見るのである。なんといつてもエピクロスの眞意が發展的に繼承されたのはデカルトに對立して唯物論を再興したガッサンディの出現を俟たなければならなかつた。かくしてそれはホッブス及びスピノーザに流れルッソー、ドルバック等に及ぶのである。勿論この兩者の系譜が絕對的に截然としているわけではない。――例えばロックの如き折衷に近いものもある。――然も尙かかる判別から個々の自然法を位置づけることが可能である。いうまでもなく前者は保守的にして穩健であり、後者は進歩的にして改革を目的としている。ケネーの樂觀主義は自然的であり自發的である自然的秩序という自然法思想に裏づけられたものと言えよう。ゆえにルッソーの社會契約說が自然的秩序の思想と相容れぬために、フィジオクラートのそれに反抗して構成されたという（註11）一說は注目に値する。

（註1・2）ローゼンベルグ、前揭書、一八〇頁。
（註3）後藤末雄、「支那思想のフランス西漸」第一書房、四五三頁 Quesnay, Despotisme de la Chine.
（註4）本田喜代治、前揭書、二〇三―四頁。
（註5）同　書　二〇四頁。
（註6）同　書　六八頁。
（註7）平井新、「近代社會思想史」慶友社、四八頁。
（註8）Gide et Rist, op. cit., P.12. note (2)
（註9）平井新、前揭書、二四頁。
（註10）同　書　三三頁。
（註11）Gide et Rist, op. cit., P.6.note (1).

五

以上のごときケネーの哲學的認識論及び方法論と自然法思想が當時の社會的經濟的狀態を分析するに當つて如何なる意義を有していたか、すなわち經濟學上不朽の偉業である經濟表の案出とはいかなる結びつきにおいて考えらるべきか。このことは前に設問したところであり、ここで問題とするところのものである。

當時は、擬制的な富を追うマーカンティリズムがその理論を體系的なものとなしえずに、現實の實踐的要求によつて容易に左右される素朴な經驗主義に基いた經濟的信條によつて直接感情に訴える金銀の獲得を目的とし、それをもつて經濟的繁榮と見做していたのに對し、これの失敗が大きく經濟的貧困を招いたためにその救濟の爲にはこの理論が根本から反省さるべき要があつた。そして、この要求は經濟現象を亘視的見地より全活動體系として捉え、その根本的な社會的階級的構成を經濟現象の本質的基盤として把握するものに迄發展せざるを得なかつた。かかる歷史的意義を擔つてケネーが出現し、その大膽にして天才的なる――時によつて獨斷とさえ思われるような――才能によつてこれを遂行したのである。勿論彼のためには多數の先驅者を必要としたのではあつたが、特にウィリアム・ペティは經濟學に自然科學的方法論を投入したことにおいて――それ以來經濟學は自然科學の影響を持ち續けたのである――特筆すべき人である。十八世紀自然科學が長足の進歩を徵すに應じて認識論及び哲學的方法論はそれに順應する發展を

示した。この事は啓蒙思想家の何人を觀ても明らかである。しかもこの自然科學的方法論は社會學、政治學、經濟學に反映して著るしい進歩を齎らしたのである。經濟學においてはペティに始まり、ケネーにおいて一應の集大成を見た觀がある。醫師ケネーはその道で既に名を成していたために自然科學における方法論は強く彼の中にそなえられ改めて學ぶまでもなかつた。それゆえ、經濟學に向う態度に些かの躊躇も必要とせず「その手に使い慣れたコンパスを握り、完全に自信を以て進んでいつた」[註2]のである。ここに「自然科學の方法を適用するに際し尚まだ手探りで進んでゆき、言葉の眞の意味における體系を造ることにはまだ成功しなかつた」[註3]ペティとの間に經濟思想上の發展を窺知できるのである。然らばケネーがいかにしてかかる方法論をもつて社會科學の原則的基盤――更には體系――を打ち出し得たのであろうか。それはケネーが自然科學における物理的世界と、社會科學における人間社會とは、區別し得ぬ程の共軛關係が存すると考え、双方に跨がる一つの法則性によつて兩者を共に律せんとしたことにある。又このことこそ、彼をして巨視的な見地に立たしめ、大なる現象群をして彼の視野に運ばしめた所以である。然らばこの兩者に跨がりそれを支配している法則性とは何をいうかと言えば、それはこの有名な l'ordre naturel（自然的秩序）の概念である。この自然的秩序は神の衣裳で被われている。即ち神が定めた自然法則（lois naturelles）によつて組立てられている不變にして最も人類に益ある秩序がそれである。從つてそれは神の啓示によつて明らかに感得しうるものであり、いわば明證的存在なのである。しかし醫師ケネーがこの自然的秩序を見事に具備しているものとして人間の身體を考えていたのである。この身體の合理的秩序はその儘經濟的秩序にも當てはまるものと彼が考えたのも至極當然であり、ハーヴェー（Harvey）の血液の循環に關する新らしい發見もあり、ここに人間の血液の循環を經濟上の富の流通に比較して再生産理論を經濟表に盛つたのである。[註4]從つてケネーにおいて社會現象は、自然科學特に生物學上の正しい適用によつて求めらるべきものであつた。かかる生物學の正しい援用をえたればこそ社會學における有機體説の先驅者たりえたし、所得配分の綜合的理論を把握した最初の人でありえたのであつた。事實チュルゴーは言う「富の流通は、その不斷なることにおいて、政治團體の生命を形造る事、恰も血液の循環が動物の生命を維持するに等しい」と。[註5]更にケネーの自然的秩序を見れば、これが「經濟表の分析」の中で次のごとき言葉となつて現れている。先ず七つの重要考察 observations importantes の第四には、「contradictoirement à l'ordre naturel（自然的秩序と矛盾して）導かれるか否かによつて」[註6]國民の利益の問題に影響を與えることを述べており、第六には assujettir à l'ordre naturel（自然的秩序に從う）ことによつて貿易を有利に、農業に活氣を與える等の利點を擧げている。[註7]かくてジイドは反問する。「然らば我等はいかにしてこの秩序を知るか。人が自然的秩序を知る特徴は明證だ。この語はフィジオクラートの書いたものには常に出てくる。而も尚この明證も認識されなければならぬ。……それはいかなる機能によるのか。本能か、良心か、理性か、超自然的啓示によつて眞理の所在を我等に知らせる神の聲によつてか、或は正しき道を我らに示す自然の聲によるのであろうか。」[註8]そして彼等の無頓着を驚くのである。しかも「唯一の、永遠の、不變な、普遍的な法規であり、明らかに神聖なものであり、本質的なものである」というボードーの自然的秩序の定義に「アヴェ・マリアの祈禱を聞く思いがする」[註9]といつている。この點は正にその通りであるが他方自然的秩序は規範的役割を擔い、人爲的秩序（l'ordre positif）を自らに準據せしむるそれ自身消極的ではあるが、反つてそこに人間の實踐を迎い容れる餘地を有する面がある。その故にこそ「經濟表」が自然的秩序の理想を表現していると同時に人爲的秩序の革新を意味しているのである。又人爲的秩序の自然的秩序からの離反を救うべくケネーは社會の病狀に對して處方箋を書き、開明君主をして實際上の治療に當らしめんとしたのであつた。[註10]かか

る自然的秩序は經濟表に盛られている自然主義的重農主義といかなる關連にあるか。それは先ず自然科學における物理的法則、生物學的狀態に見られる自然的秩序が、社會科學に於て正當に適用されているところに彼を巨視的見地に赴かしめた重要な進歩性が約束されている反面、その物理的形而上學的見解が經濟現象の歴史性の分析を妨げる制約性を有していた。しかして自然的秩序は現實社會において考察される場合、變轉極まりない現象面即ち流通部面にあつてよくそれをすることができなかつたために、殆んど年生産樣式にして變化の少ない農業生産部面に眼を轉ずる要があつた。これこそマーカンティリズムとの決定的な袂別を意味する。しかも流通部面から生産部面への轉化こそ經濟學上科學的功積として第一に評價さるべきである。かかる農業生産部面に對する攻究は、一つには「嵐の吹きすさぶ市場からそれに依存すること最も少なき部面へ」（註11）と眼を移すことを餘儀なくされたということの外に、當時のフランスの社會的經濟的狀態が農業生産の再興を要求していたこと及びそれが自然法思想に結び付く可能性を有していたことにある。更に又自然的秩序は人間社會を幸福にすべきメシヤ的法則とも考えられたために、生産は物質の增大と考えられた。然るに生産部面においても工業部門は單なる物質の變形としてのみ映るに過ぎなかつたため、この物質の增大は農業生産においてのみであるという感覺的判斷が行われたのである。それと同時にこの秩序は不變永遠のものとして歴史と對立したため、資本主義をして歴史的所産とみなさず、自然的生産樣式と見たために、一定の階級的社會構造を持つ再生産を考えつゝも、尙そこに自然經濟である農業部門を偏重するきらいがあつた。それにも拘らずその體系は「資本主義的生産についての最初の體系的な説明である」（註12）ことを妨げられはしないばかりか、マルクスをして次の如く言わしめている。「彼等にとつては必然的に生産のブルジョア的形態がその自然形態として現れる。彼等がこの形態を社會の生理的形態として、即ち生産自身の自然必然性から生れた意思、政治から獨立せる形態として理解したという事はその大なる功績であつた」（註13）と。かくて自然的秩序は自らを貫徹する意味において本質的な生産部門に視野を定め、農業を中心とする綜合的な體系把握を成就したのである。これは歴史的にはコルベールティズムに對したボアギルベールの繼承であり完成と見るべきであろう。

（註1）久保田明光、「ケネーに於ける物理的世界と倫理的世界への序説」參照。
（註2・3）ローゼンベルグ、前掲書、一八四頁。
（註4）H.Denis, Histoire des systèmes économiques et socialistes. 1904. Tom 1.）の掉尾にはハーヴェイの「血液の循環の圖」とケネーの「通貨の干渉なき富の循環の圖」とを並置せしめた圖が掲載されている。
（註5）Gide et Rist., op. cit, P. 20.
（註6）Quesnay, Oeuvres. P. 320.
（註7）Quesnay, op, cit., P. 322.
（註8）Gide et Rist, op cit., P. 9.
（註9）Gide et Rist, op cit., P. 10.
（註10）ローゼンベルグ、前掲書、一八九―一九〇頁。Quesnay, Oeuvres. P. 331.
（註11）ローゼンベルグ、前掲書、一八五頁。
（註12）マルクス、「資本論」第二卷、高畠譯、三一九頁。
（註13）マルクス、「剩餘價値學説史」邦譯「マル・エン全集」第八卷、五八頁。

（追記）坂田太郎譯「ケネー經濟表以前の諸論稿」の公刊を見たため本稿、二、三節は不要のものとなつたが、古いまま筆を加えぬことにした。